

「生きる力」をはぐくむ教育の新たな展開

初等教育資料

編集:文部科学省教育課程課/幼児教育課

特集①

小学校における 勤労観・職業観をはぐくむ教育



- 解説:小学校におけるキャリア教育の充実のための施策 文部科学省児童生徒課
 論説1:小学校で育てたい勤労観・職業観と指導の課題 宮下和己
 論説2:小学校での勤労観・職業観を育てる教育の指導の工夫 川崎友嗣
 事例1:全教科を通した指導の工夫 千葉県四街道市立みそら小学校
 事例2:キャリア教育の視点に立った総合的な学習の時間の実践 京都市立紫竹小学校
 事例3:特別活動を中心にした指導の工夫 熊本県熊本市立古町小学校
 座談会:小学校に期待される勤労観・職業観をはぐくむ教育
 藤田晃之/四ヶ所清隆/谷内口まゆみ/熊谷茂樹/杉田洋

特集2 学習指導の創造と展開

- 【生活】安藤直哉 【音楽】津田正之/比嘉智子
 【図画工作】奥村高明/三澤一実/大野木位行/岡田京子 【家庭】筒井燕子/勝田映子 【体育】野島賢/根不地

教育の回廊:骨が語る 人間が見える 宮永美知代
 地域からの発信:(大阪府)子どもと大人がともに学び合う場の提供
 教育研究最前線:アドラー心理学に基づく話し合い活動
 特色ある学校を訪ねて:(熊本県)よりよい生活や人間関係を築く特別活動の実践
 子どもが学ぶ・子どもに学ぶ:美蘭原町・元気原町・情熱原町!
 幼児教育:質の高い学校関係者評価のための足場づくり
 認定こども園:学校評価等の取組による教職員の共通理解形成

学校評価等の取組による 教職員の共通理解形成

認定こども園 金城幼稚園・金城保育園 [新潟県]

〔園の概要〕 平成22年7月1日現在予定

類型	幼保連携型						合計
	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	
保育に欠ける子	0	4	6	15	12	14	51
保育に欠けない子	0	0	2	11	11	15	39
開園時間	7時30分～19時（平日）						
学級数	5クラス（1歳児からの受け入れ）						
職員の配置	各クラス2名（複数担任制）+ 3名主任体制						
施設の概要	園舎面積			敷地面積			
	1,150㎡			3,090㎡			

金城幼稚園は、魚沼産コシヒカリの産地として有名な南魚沼市塩沢にあります。塩沢は春から秋にかけてはのどかな田園風景がひろがり、冬は3メートルを超える豪雪に見舞われることもある雪国です。一昔前までは3世代家族で生活していたこの地域でも、15年くらい前から核家族化そして少子・高齢化社会が進んできました。このような地域の状況の変化に対応するため、平成20年4月から金城保育園を設立し、幼児教育・保育・子育て支援の各機能と、幼稚園・保育園・児童館という専用施設をもった認定こども園となりました。

1 地域の要請にこたえて

学校法人金城学園金城幼稚園は、昭和四一年に私立幼稚園として創立し、昭和六三年一月に現在地に移転新築後、平成元年に学校法人となりました。平成九年四月に創立した社会福祉法人若葉会わかば保育園（三歳未満児専用小規模保育所）は、学校法人金城学園金城幼稚園とともに姉妹園として乳幼児の健全育成のために協力し合い、幼稚園と保育園の連携を深めるべく、一貫した方針のもと各年齢にふさわしい充実した保育を行うよう努めてきました。

また、金城幼稚園とわかば保育園は、平成一七年度には文部科学省・厚生労働省による全国総合施設モデル事業に選ばれました。このモデル事業により自らの園を客観的に評価することの大切さを学びました。

2 学校評価の取組

平成二〇年度に文部科学省が社団法人新潟県私立幼稚園協会に委託した「幼児教育の改善・充実調査研究」で、新潟県内五園のうちの一つとして「認定こども園における学校評価の在り方」について調査研究に取り組みました。平成二〇年度は、職員にとって負担感の少ない、認定こども園の評

価項目（指標）を策定することから始め、自己点検・自己評価の方法、客観的な評価を行う組織づくりを中心に調査・研究を行いました。

平成二一年度も引き続き取り組むこととなり、園単独で認定こども園にとって必要最小限の評価項目（指標）づくり、自己点検・自己評価の方法（まとめ方・組織づくり）、職員間の意識の共有化、学校関係者評価の実施等について検討し、研究成果の発表、冊子編集を行いました。

学校関係者評価委員会については、より客観的な学校評価となるよう考慮し、開催しました。一回目は、学校関係者評価委員会の役割と平成二〇年度版学校評価の説明、二回目は、平成二一年度学校評価全般の取組と自己評価公表シートに基づき説明を行いました。



その後、委員会における評価と評価紙による評価を行いました。その結果、委員の様々な前向きな意見を踏まえ、教

職員一同自信と自覚をもち公表することができました。

3 これまでの成果と今後の課題

(1) 学校評価実施による成果

①自己評価は、評価の数値化より、大項目ごとの「この項目でよくできたと思うこと」や「課題とと思ったこと」や「課題とと思ったこと」を「具体例」とともに書き出す作業により各人保育に対する意識が明確となりました。

②大項目ごとに担当者を決め、この項目でよくできたと思うことや「課題とと思ったこと」「具体例」をまとめる作業で園全体の特徴や課題が見え、自己評価から見えた園の特徴や課題をもとにグループディスカッションを通して、さらによりよい保育に向けての全教職員の共通理解が形成されました。

③学校関係者評価を含め学校評価の結果を公表することで体外的な信用が高まり、さらに地域の理解が得られました。

(2) 今後の課題

①園全体の特徴や課題の共通理解を図り、教職員の資質向上に効果がありません。しかし、年度ごとの教職員の役割変更と新卒者等で意識がずれが出来ます。時間的

な制約がありますが、年二回の自己評価やグループディスカッションを行うことが求められます。継続的に行うことで教職員の資質向上から保育の質の向上、さらによりよい子どもの成長につながっていくことと思えます。

②大項目ごとの担当者は、主任クラスの経験と判断力が求められます（八項目をすべて行うには最低四人必要）。

③学校関係者評価委員会メンバーの方も、園全般を見通せるには二、三年の期間と年三回程度の委員会開催が必要です。

4 まとめ

今年度も一回目の自己評価を行い、大項目ごとのまとめを行っています。自己評価にかかる時間が少なくなってきたこと、評価担当者のまとめ方もよくなり、よくできていることや課題、そして課題の解決に向けた具体例を的確に表すことができました。継続的に評価を行うことで、教職員の保育観について共通理解が図られ、保育の質が高まる等、学校評価の成果が上がってきていると実感しています。

（認定こども園金城幼稚園・金城保育園長 角谷正雄）